

日本英文学会関東支部 第27回（2026年度夏季大会） プログラム

日時：2026年6月20日（土）
会場：中央大学後楽園キャンパス
〒112-8551 東京都文京区春日 1-13-27
後援：中央大学

アクセス方法

東京メトロ丸ノ内線・南北線『後楽園駅』から徒歩約5分
都営三田線・大江戸線『春日駅』から徒歩約6分
JR中央・総武線『水道橋駅』から徒歩約12分
JR中央・総武線『飯田橋駅』から徒歩約17分

本学会は会員による活動を基盤として運営されております。
本大会へのご参加は原則として会員の方を対象としております。当日は非会員の方の
聴講も可能ですが、ぜひこの機会にご入会いただきますようお願い申し上げます。
ご入会案内はこちら → https://elsj.org/membership/membership_top.html

日本英文学会関東支部事務局

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂1-2
研究社英語センタービル
Tel/Fax 03-5261-1922
E-mail: kanto@elsj.org

11:00 12:00	理事会 5号館3階5334教室	
12:00 	開場・受付開始 受付：6号館4階廊下&5号館3階ロビー <u>※14:25以降の受付は、5号館3階ロビーに統合</u> 書店展示：5号館3階ロビー 発表者控室：6号館4階6418教室&5号館3階5336教室 <u>※14:25以降の控室は、5号館3階5336教室に統合</u>	
研究発表1 6号館4階 13:00 13:40	第1室 6413教室	第2室 6417教室
	『ラウンド・ザ・レッドランプ』 と『スターク・マンローからの手紙』 に見る医業の暗部——医者をめぐる市場と倫理のせめぎ合い (発表者) 矢野 奈々 (司会) 島 高行	現代英語における that 節補文とその特徴について——構文文法的考察 (発表者) 片岡 那月 (司会) 一條 祐哉
研究発表2 6号館4階 13:50 14:30	『オセロー』における音楽の利用 (発表者) 檀浦 麻衣 (司会) 木村 明日香	語学教育と文学教育の有機的接続を可能にする作問の方法論——George Orwell “Shooting an Elephant”を題材に (発表者) 中島 勇斗 (司会) 土屋 結城

<p>部門別 シンポジウム</p> <p>5号館3階</p> <p>14:40 16:40</p>	<p>【シンポジウム 1】 イギリス文学部門 5333 教室</p> <p>「リアル」の生まれるところ——現実と非現実の境界をめぐって</p> <p>(司会・講師) 工藤 紅 (講師) 唐戸 信嘉 (講師) 浜野 志保</p>	<p>【シンポジウム 2】 アメリカ文学部門 5334 教室</p> <p>越境する環境詩学 (エコポエティクス)</p> <p>(司会・講師) 山本 洋平 (講師) 来馬 哲平 (講師) 古村 敏明 (講師) 小池 昌代</p>	<p>【シンポジウム 3】 英語学・英語教育部門 5335 教室</p> <p>AI 時代を Survive する英語教師——英語授業を再定義する</p> <p>(司会・講師) 加藤 洋昭 (講師) 甲斐 順 (講師) 目黒 庸一 (講師) 柳川 浩三</p>
<p>17:30 19:30</p>	<p style="text-align: center;">懇親会 3号館食堂 (1階)</p>		

開場・受付開始 (12:00 より 6号館 4階廊下 & 5号館 3階ロビーにて ※14:25 以降の受付は、5号館 3階ロビーに統合)

13:00-13:40 【研究発表 1】

第1室 (6号館 4階 6413教室)

(発表者) 北里大学専任講師 矢野 奈々
(司会) 実践女子大学教授 島 高行

『ラウンド・ザ・レッドランプ』と『スターク・マンローからの手紙』に見る医業の暗部
——医者をめぐる市場と倫理のせめぎ合い

『シャーロック・ホームズ』シリーズの作者として知られるアーサー・コナン・ドイルの『ラウンド・ザ・レッドランプ』(1894) と『スターク・マンローからの手紙』(1895) は、彼の医師経験を色濃く反映した作品である。本発表では、従来自伝性や医者像のリアリズムの観点から論じられてきたこれら二作品を、「市場」と「倫理」のせめぎ合いという視点から検討する。19世紀イギリスの開業医は、患者数や評判に生計を左右される一方で、専門職としての規範や礼節も求められていた。こうした医療社会史的背景を踏まえつつ、医療を主題とする短編集と書簡体小説という異なる形式において、開業医の日常に潜む圧力や葛藤がいかに表象されているかを検討し、ドイル文学における「医業の暗部」の意味を明らかにすることを目的とする。

第2室 (6号館 4階 6417教室)

(発表者) 駒澤大学大学院博士課程 片岡 那月
(司会) 日本大学教授 一條 祐哉

現代英語における that 節補文とその特徴について
——構文文法的考察

本発表は、英語における that 節補文の形式と意味の関係を構文文法 (Goldberg (1995)) の観点から再検討する。

- (1) a. What did Mary say that there were in the caviar?
b. *What did Mary whisper that there were in the caviar?

従来、(1)の例に見られる文法性の差に基づき、発話動詞 say に後続する that 節補文は項、発話様態動詞 whisper の場合には付加詞と、動詞の語彙特性を基に統語的地位が分類されてきた。

- (2) Just who do you think [ϕ /*that] you are?

しかしながら、(2)の対立が示すように、補文標識 that の有無も統語的振る舞いに影響を与える (Shim and Ihsane (2017))。本発表では、中右の「既定性」に基づき、that 節補文が2つの構文タイプに分かれることを例証する。これにより、補文標識 that の有無と項的・付加詞的振る舞いの違いを統一的に説明する。

13:50-14:30 【研究発表 2】

第 1 室 (6 号館 4 階 6413 教室)

(発表者) 埼玉県立大学准教授 檀浦 麻衣
(司会) 中央大学准教授 木村 明日香

『オセロー』における音楽の利用

照明や音響設備が十分に発達していなかった初期近代英国において、演劇は「見る」よりも「聞く」娯楽であった。ハムレットが「さあ、明日芝居を聞こう」(2.2.455) と言うように、劇世界は聴覚的要素に多くを負っており、とりわけ音楽はキャラクター表象やプロットと深く関わっていた。本発表では、『オセロー』における音楽や音楽的比喩に着目し、オセローとデズデモーナの夫婦のすれ違いがどのように表象され、どのようにシェイクスピア時代の観客に理解されたかを考察する。

G. Wilson Knight が “The *Othello* Music” (1930) において、オセローの台詞の音楽的詩学を指摘して以来、F. W. Sternfeld や Rosalind King、Linda Phyllis Austern らが『オセロー』における音楽の利用を論じてきた。しかし従来の研究では、「柳の歌」に代表されるように、特定の場面における歌や音楽概念、台詞の音楽性が分析されるものの、劇全体における音楽の役割を論じる批評は少なかった。この点を踏まえて、本発表は音楽や音楽的比喩を手がかりに、現代の私たちが気づきにくい、オセローとデズデモーナの悲劇を再考したい。

第 2 室 (6 号館 4 階 6417 教室)

(発表者) 東京大学大学院修士課程 中島 勇斗
(司会) 実践女子大学教授 土屋 結城

語学教育と文学教育の有機的接続を可能にする作問の方法論
——George Orwell “Shooting an Elephant”を題材に

日本の中等教育における外国語教育では、単語や文法といった言語運用の基礎を身に付け、それらを 4 技能 5 領域へと活用する「知識・技能」、実践的なコミュニケーションを行うための「思考力・判断力・表現力」、さらに言葉の背景にある文化理解に努める「主体性」という 3 つの資質・能力の育成が目標とされている。こうした明確な学習目標を有する外国語学習の延長線上に、極めて解釈の自由度が高いメディアを扱う英文学の領域が位置づけられる際、語学教育と文学教育とを密接に結びつける方法論の検討が求められる。そこで本発表では、問いの形式を用いてテキストの勘所を細分化することで、物語を解釈する思考過程を実践的に体験できる教材の作成を試みる。具体的には、文学教育における作問に関する先行研究を援用しつつ、George Orwell の短編“Shooting an Elephant”を教材作成の観点から分析することで、語学教育と文学教育の有機的接続を可能にする具体的な作問方法を明らかにする。

14:40-16:40 【部門別シンポジウム】

〈シンポジウム 1：イギリス文学部門〉（5号館 3階 5333 教室）

（司会・講師）立正大学准教授 工藤 紅
（講師）白鷗大学准教授 唐戸 信嘉
（講師）千葉工業大教授 浜野 志保

「リアル」の生まれるところ ——現実と非現実の境界をめぐる

「リアルとは何か」。物語的想像力、科学的証明、さらには映像や記録といったメディアの働きを通して、「リアルとされるもの」は絶えず作られてきた。近年では AI による生成画像や音声、テキストが急速に普及し、「本物らしさ」や「事実らしさ」をいかに判断するのかという問題が改めて浮上している。本シンポジウムでは、19 世紀から現代に至るテキストや表象を手がかりに、現実と非現実の境界がどのように立ち上がり、どのように知覚され、そして時に崩れていくのかを多角的に検討する。19 世紀イギリス小説をはじめとする文学と現代メディアという異なる領域から、とりわけ語りや知覚の問題、さらには記録やメディアの形式にも注目しながら、「リアル」という概念を改めて考える。

怪物の現れ

——『フランケンシュタイン』における睡眠と覚醒の境界

工藤 紅

メアリー・シェリーは、“waking dream”、すなわち白昼夢をきっかけに『フランケンシュタイン』（1818）を構想したという。作者は自身の夢のヴィジョンを小説という形で現実世界に定着させたのである。本作において主人公ヴィクターの行動は、怪物創造直後の悪夢、発熱や極度の疲労の中での幻視、北極圏での追跡など、決定的場面において半覚醒的な意識状態のもとで展開される。これらの場面では、現実と幻想、生と死、人間と怪物の区別が揺らぎ、恐怖は外部から侵入するのではなく、不安定な知覚の内部から立ち現れる。ヴィクターにとって「眠り」とは何なのか。怪物はいかなる瞬間に「現実化」するのか。本発表では、本作における「睡眠と覚醒の境界」に注目する。そこに描き出される「現実」の不確かさを再考することで、19 世紀イギリス文学において現実がいかに経験され、揺さぶられるのかを考えたい。

魂と死後の生の証明をもくろむ科学
——マリー・コレリの反実証主義

唐戸 信嘉

現在では通俗的なゴシック作家と見なされるマリー・コレリの思想は、世紀末スピリチュアリズムや神智学運動の一変奏として大まかに理解されてきた。本発表はその理解を再検討し、『リリスの魂』（1892）の読解を通じてコレリが「科学的心霊主義」を批判していたことを論じる。『二つの世界のロマンス』（1886）では精神の電氣的エネルギーへの還元を示唆した彼女が、本作では魂の証明を試みた磁気術師エル・ラーミの敗北を描く。ここには明らかな思想的転換がある。心霊研究協会（SPR）創設者の一人 F・W・H・マイヤーズは 1903 年の著作で魂の死後存続を科学的に証明しようとしたが、コレリはその 11 年前に、精神を物質的手法で捉えようとする自体が唯物論的であると断じ、精神や魂の領域のリアリティは科学では論証できないと示唆している。本発表はこの点に着目し、20 世紀の反実証主義的潮流を先取りした作家としてコレリを再評価したい。

〈残された記録〉はなぜ怖いのか
——ゴシックから現代日本のモキュメンタリーまで

浜野 志保

『ブレアウィッチ・プロジェクト』（1999）の大ヒット以後、フィクションでありながらドキュメンタリーのように構成された〈モキュメンタリー〉形式のホラー作品が世界中で量産されてきたが、日本では 2020 年代に入り、背筋『近畿地方のある場所について』（2023）やテレビ東京「TXQ FICTION」シリーズ（2024～）などのモキュメンタリー・ホラーが幅広い人気を獲得している。ただし、リアリティを付与する仕掛けとしての〈残された記録〉自体は新しいものではなく、『オトランド城奇譚』（1764）『フランケンシュタイン』（1818）『ドラキュラ』（1897）等でも、作品の一部または全部を作者以外の誰かが書いている、という設定が用いられている。本発表では、ゴシック小説から現代モキュメンタリーにいたる〈残された記録〉のバリエーションを概観し、この仕掛けが地域や時代を超えて効果を発揮する仕組みについて考える。

〈シンポジウム 2：アメリカ文学部門〉（5号館 3階 5334 教室）

（司会・講師）明治大学教授 山本 洋平
（講師）青山学院大学准教授 来馬 哲平
（講師）明治学院大学教授 古村 敏明
（講師）詩人 小池 昌代

越境する環境詩学（エコポエティクス）

エコポエトリーは、癒やしや自己投影の対象として自然を描く旧来の「自然詩」に対し、人間とノンヒューマンの相互依存を重視し、「自然」の概念を攪乱する批評的な概念である。エコクリティシズムが第一波から第二波へと深化する過程とも対応しつつ出来たエコポエトリーは、言語行為そのものを環境の一部と見なし、詩的実験を通じて人間中心主義的な思考回路や資本主義的なハビトゥスを暴き出す可能性を秘めている。詩というジャンルにおいては際だって屹立する「私」の解体やノンヒューマン・エージェンシーの想定によって、環境文学の可能性を拡張しうる視座でもある。本シンポジウムは、時代や性別、言語の壁を越境しながらエコポエトリーについて詩論を交叉させることで、詩的言語が環境危機に対して持ちうる潜在力を紡ぎだそうとする試みである。

Eco-Sentience（エコロジカルな有感性）
——ディキンソン、ホーガン、小池昌代

山本 洋平

エコポエティクスを越境的に考えるとき、ゆるやかながらもクリティカルな源泉を共有する不可視の連帯があるように思われる。その連帯のうちに見出されるのは、ノンヒューマンの痛みと共振する繊細さであり、他者の痛みを慮る empathy を介して繋がる言語的かつ身体的な想像力である。それを私は〈有感性の共同体〉と呼びたい。自己の苦痛や喪失をノンヒューマンを含めた他者のそれと重ね合わせる感受性を、安易な他者理解に堕することなく表現することはいかに可能か。この問いを念頭におきながら、アメリカン・エコポエトリーの源泉にエミリー・ディキンソンを据え、時空を越えて織りなされる〈有感性の共同体〉について考える。そこに集う多くの現代詩人のうち、Linda Hogan と小池昌代の詩に焦点を絞り、エコポエティクスの越境性をめぐるシンポジウムの話題提供としたい。

“Be Brave to Things”
——Jack Spicer と未明のエコロジー

来馬 哲平

動植物や地水火風や死者の「声」を書き写す霊媒的な詩人像は古今東西を問うことなしに見当たる型のひとつだが、人外のソースはもとより極小から極大の物に怖い主体を感知して、それらの不気味な存在に詩を書かせられるオブジェクトとして自らを組織した Jack Spicer (1925-65) は、主体の自壊を厭わずに自らの詩に異物を容れる無防備な受動の構えと、性などの制度へのパラノイア的な（自己）批判に詩を恣意的に使役する自己矛盾の苛酷さに特異性が見出せる。環境人文学の域ではほぼ無名であるものの、負のアニミズムを準備する凶々しい感応力と、無意味や戯れへの忠誠と、ポスト構造主義的な学びを誘う知を映す Spicer の実践は、近年 Timothy Morton が提唱している暗い環境思想のよこしまな「継承者」として Spicer を措定せしめる錯視の契機を供し得る。本発表ではその遠近法的倒錯を試みに採用し、両者の言葉が呼応する線を粗描することで、環境詩学の領野における Spicer の詩の限界と今日性を望み見たい。

共同体行為としての “Healing”
——現代詩が体現する Implicit Alliance

古村 敏明

2024 年に刊行されたアンソロジー、*You Are Here: Poetry in the Natural World* の序章にて、Ada Limón は bell hooks の以下の言葉を引用する：“Rarely, if ever, are any of us healed in isolation. Healing is an act of communion” (4)。癒しや回復における共同体の重要性を bell hooks の言葉は示すが、Limón がエコポエトリーのアンソロジーの序章で bell hooks に言及する前提には、人間を含む自然界は新しい治癒を必要としている、という世界観がある。そして、その世界観の延長に、ecological interconnectedness にとどまらない、同じ場所に生息するものたちの間に存在しうる潜在的同盟性 (implicit alliance) と呼称すべき概念が垣間見える。

本発表では、Ada Limón の *The Hurting Kind* (2022) と *Startlement* (2025) を基軸として、*You Are Here: Poetry in the Natural World* (2024) に収録された詩や、Margaret Atwood の *Dearly* (2020)、William Stafford や Elizabeth Bishop などのエコポエトリーが体現しているようにみえる implicit alliance の概念を提示する。この概念化をとおして、現代社会が直面する環境問題や、それに付随する solastalgia や eco-anxiety などの心理的悲痛に対し、現代詩はどのように美と思想を融合させることで、どのような healing をもたらしうるか、などの問いについて考える。

変容する生命体と詩表現
——鳥をめぐる

小池昌代

ここ何年か、和歌から現代詩、翻訳詩までを、広く視野に入れ、詩というものの発生を考えてきた。漠然と思うことは、古来、わたしたちが、大きく「自然」と捉えるもののなかから、詩的イメージや詩を生み出すエネルギーそのものが湧き出てきたのではないかということだ。少なくとも、人間と自然とは、相互侵犯的に、その存在を互いに食い込ませながら、有機的にダイナミックに関係してきた。震災以後はとりわけ、「生命」、「死」、そして、無意識の領域では死と直接的につながり合う、「夢」というものに対して、私たちの感受性が敏感に開かれてきたと感じる。気になるのは、詩のなかの、動・植物の存在である。それらはどのように書かれ、語られてきただろう。作品化・虚構化の過程で、本来、「規定する」働きを持つ言葉が、たえず変化・変容する生命体を、どのように表わしてきたのか。鳥をめぐる、ルイーズ・グリュックと宮沢賢治の詩(童話)の他、西行・定家・式子内親王などの和歌を、精読しながら考えてみたい。

〈シンポジウム 3：英語学・英語教育部門〉（5号館 3階 5335 教室）

（司会・講師）聖徳大学専任講師 加藤 洋昭
（講師）帝京大学教授 甲斐 順
（講師）日本大学講師 目黒 庸一
（講師）法政大学准教授 柳川 浩三

AI 時代を Survive する英語教師 ——英語授業を再定義する

生成 AI の発達は、英語教育における教師および学習者の在り方に大きな影響をもたらしている。近年では、ChatGPT をはじめとする生成 AI、自動翻訳ツール、AI 英作文添削アプリなどが急速に普及し、単語や文法学習のみならず、英文作成や会話練習に至るまで、学習者が個人で取り組める範囲は従来に比べて大きく拡大している。本シンポジウムでは、4 名の登壇者がそれぞれの教育実践および研究知見を基に、AI 時代における英語授業と英語教師の役割について多角的に議論する。コミュニケーション型授業を通じた相互作用と創造的な学び、英詩を活用した感性や探究を促す学習、認知スタイルの違いを踏まえた第二言語習得研究、さらには社会問題を題材とした問いを中心とする授業実践など、多様な視点から「教室だからこそ可能な学び」の在り方を検討する。

AI 時代に学ぶ英語授業

加藤 洋昭

生成 AI は、英語教師の授業準備や指導において、大きな変化をもたらしている。語彙リストや和訳の作成、ライティングにおけるフィードバックなど、その活用方法は多岐にわたる。その一方で、知識伝達を中心とした従来型の授業観は再考を迫られており、「教室で学ぶ意義」や「英語教師の専門性とは何か」という根本的な問いが改めて浮かび上がっている。

AI によって代替可能な学習活動が増える中で、英語授業において教師にしか担えない役割とは何か、また、教室という空間だからこそ成立する学びとは何かを検討する必要がある。英語によるコミュニケーション型授業を通して、学習者同士、あるいは学習者と教師との相互作用を促進し、双方向的なコミュニケーションを基盤とした創造的な学びの場を形成することが、これからの英語教師に求められる重要な役割の一つであることを提案する。

『薔薇は赤い』から探究する英語教育

甲斐 順

伝承童謡の1つである Roses are red で始まる4行詩(Roses are red, / Violets are blue, / Sugar is sweet, / And so are you.)には魅力が満ち溢れています。本発表では、この英詩について、先人たち(谷川俊太郎, 和田誠等)が取り組んだ和訳の一部、そして和訳を越えた意味等(使用時期、花言葉等)について触れ、英詩を英語授業に活かすことの意義について語ります。

認知スタイルが第二言語習得に与える影響

目黒 庸一

認知スタイルの一つである場依存・場独立(field dependence/independence; FD/FI)とは、情報を知覚、処理、記憶する際に用いる個人特有の認知的アプローチである(Witkin & Goodenough, 1977, 1981)。FIスタイルの学習者は、注意制御(attention control)に優れ、情報を効率的に処理できる一方、FDスタイルの学習者は、注意の制御に認知資源を多く割くため、情報処理に利用できる認知資源が相対的に少なくなる傾向がある(Goode, et al., 2002)。本発表では、先行研究をもとに、FD/FIが第二言語(L2)習得に与える影響を考察する。特に、FD/FIの違いによって学習者がL2インプットをどのように処理する傾向があるのか、またAI活用を含めた授業設計においてどのような指導上の示唆が得られるのかを検討する。

パレスチナ

柳川 浩三

AIの急速な到来と教室でのICTの普及に伴い、教室での我々英語教師の存在意義が今問われています。私は我々の存在意義は3つしかないと思っています。第1に、教室という場づくりをすること。学生一人ひとりの情動に気を配りつつ、学生の知的・自律的欲求を満たし、彼らの感性に触れる授業を共に創り上げること。第2に、そのために、問いを投げかけ、タスクで教室を揺さぶること。第3に、L2 modelとしての自分を学生に表現すること。つまり、なるべく英語で英語の授業をすること。本発表冒頭では、AIの強みと弱みに触れた後、パレスチナ問題を探求する授業で発表者が開発途上の教材(教科書)を第1、第2の点から批判的に検討します。加えて、当該問題に対する理解と関心を深めます。

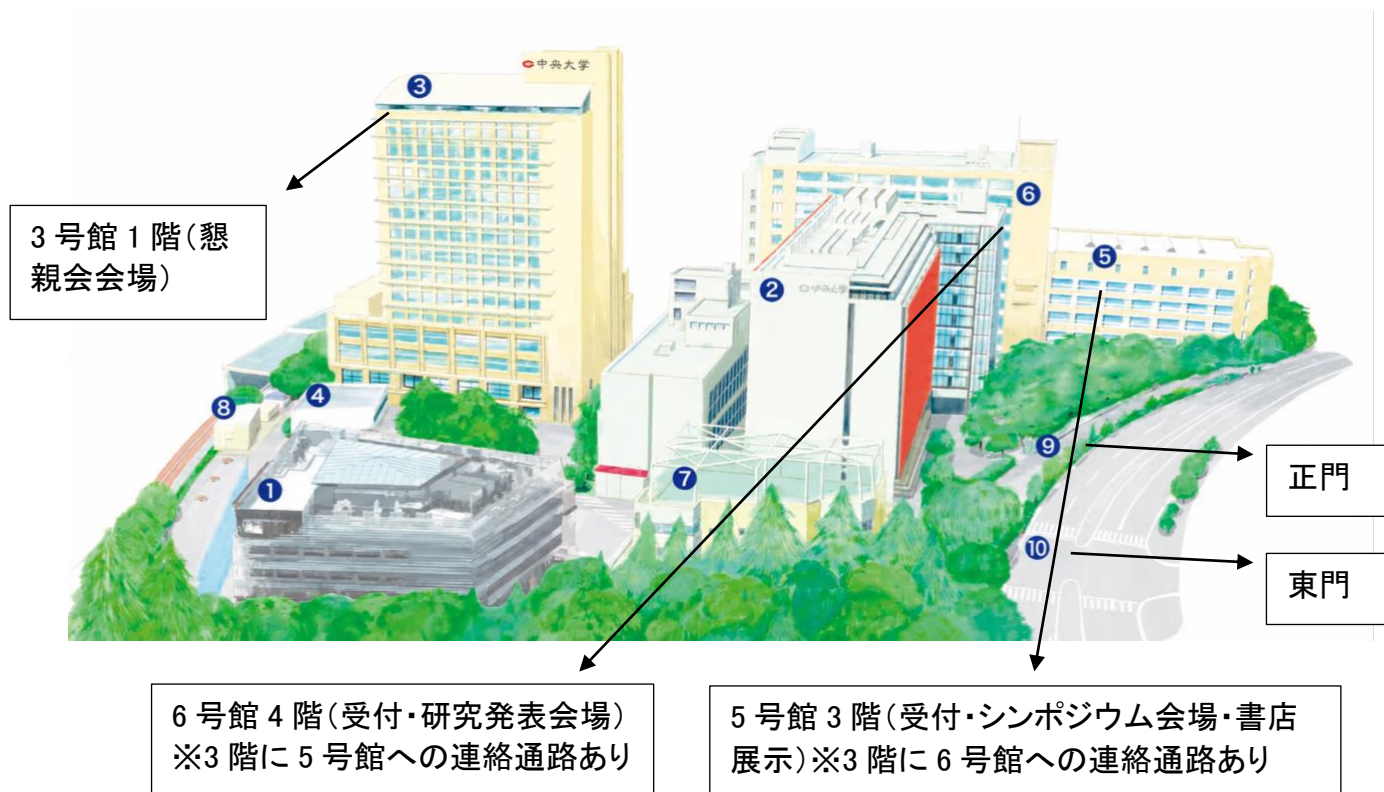
アクセスマップ (※中央大学より許可を得て大学 HP より転載 (一部加工))
(https://www.chuo-u.ac.jp/uploads/2026/03/access_korakuen_01.pdf?1778824647767)



アクセス方法

- 東京メトロ丸ノ内線・南北線『後楽園駅』から徒歩約 5 分
- 都営三田線・大江戸線『春日駅』から徒歩約 6 分
- JR 中央・総武線『水道橋駅』から徒歩約 12 分
- JR 中央・総武線『飯田橋駅』から徒歩約 17 分

キャンパスマップ (※中央大学より許可を得て大学 HP より転載 (一部加工))
(https://www.chuo-u.ac.jp/uploads/2026/03/access_korakuen_01.pdf?1778824647767)



懇親会について (17:30-19:30)

・会場：中央大学 後楽園キャンパス 3号館食堂 (1階)
(〒112-8551 東京都文京区春日 1-13-27)

※現在キャンパス内で大規模工事が行われており、動線が上記マップと異なる可能性があります。詳細は大会当日のご案内をご参照ください。

・会費：5,000円 (事前振込) / 6,000円 (当日支払)

※ご出席の場合、以下の URL または QR コードにて事前にご予約のうえ、会費は事前振り込みにて承ります (受付は申込先着順といたします)。

※予約は6月8日 (月) 締切、事前振込は6月12日 (金) 締切です。

予約用 URL : <https://forms.cloud.microsoft/r/4xKVHFuZvY>

予約用 QR コード

